特集「生物多様性と造園学」にあたって

Biodiversity and Landscape Architecture

担当編集委員 高橋 進・倉本 宣・北村圭一

特集の趣旨

生物多様性は1980年代に誕生した新しい概念であり、レッドデータブックの刊行や生物多様性条約の成立を契機として、生物学研究分野としてのみならず、広く環境政策をはじめとする各種政策や社会全体の規範を構成するまでになってきている。

一方で、生物多様性の概念は幅広く、必ずしも一般的には明確になっていない。生物多様性の対象としては、希少野生生物から身近な生き物までの遺伝子、種、生態系の各レベルがあり、その保全と利用のための具体的対応としても、生物多様性国家戦略策定、各種計画・政策への生物多様性の組み込み、環境影響評価、保護地域の指定・管理、生態系の修復・復元、種の回復と生息地への再導入、移入種への対策などの各事項における研究、教育、政策、国際協力など広範囲である。

こうした広範な生物多様性の確保を現場で担っているのは、人と自然の空間的関係学である造園学徒であることが多い。これまで造園学会あるいはランドスケープ研究においては、生態工学研究委員会でビオトープや移入種などを取り上げたほか、国土デザインの観点から保護地域やグリーンコリドーなど、また都市や農山村などでの自然環境の保全と整備など、生物多様性に関連する分野を幅広く取り上げている。

しかし、本誌ランドスケープ研究として、生物多様性はいまだ正面からは扱っていない。そこで、この特集では、生物多様性に馴染みの浅い読者にも概要が理解いただけるようにするとともに、生物多様性を造園学の中にどのように位置づけ、造園家に関わっていくことができるのか、そして造園家がその役割を果たすことによって生物多様性の保全の成果があがるのかを論じたい。前述のとおり、生物多様性の具体的対応は広範であり、生物学的に大きく分けると種アプローチと生態系アプローチとがある。紙面の都合上これらすべてを取り上げることはできず、またこの巻では既にランドスケープエコロジーの特集を刊行しているので、本特集では種アプローチに焦点を合わせることとした。

特集の構成

本特集は、生物多様性についての総論、種アプローチの各論およびまとめの座談会の3部から構成されている。

総論では、これまでの研究や政策の動向を取りまとめ、生物多様性概念の全体像あるいは造園学との関わりを把握できるように努めた。まず、ランドスケープ研究その他研究誌における生物多様性に関連する研究の紹介・レビューをしていただいた。政策関連の3編では、まず地球環境政策における生物多様性概念の変遷と国内生物多様性保全政策の変遷を論じていただいた。次に、生態系に配慮したまちづくりの計画論や取組事例をご紹介いただき、最後に生物多様性国家戦略の概要と見直しにあたっての考え方などを示していただいた。

種アプローチの各論では、研究者の方々から、それぞれの分野での研究や保全の取り組みについて論じていただいた。絶滅種対策の基となるレッドデータブックについては、作成への参画体験を通じて今後の問題点などを論じていただいた。猛禽類とツキノワグマについては、それぞれ生態的特色や我が国における生息状況をご紹介いただくとともに、保全管理について論じていただいた。既に野生では絶滅したコウノトリについては、絶滅の経過と野生復帰に向けての研究をご紹介いただいた。最後に、植物種保全の観点から、植生管理を通じての造園家と生物多様性保全の関わりについて提言いただいた。

座談会は東京港野鳥公園において実施し、コアジサシの繁殖誘致をケーススタディに、生物多様性の保全整備のあり方などを討論していただき、「生物多様性と造園学」のまとめとした。

以上、今回の特集は、紙面の都合で広範にわたる生物多様性分野の一部を取り上げたに過ぎず、造園学徒として生物多様性にどう関わればよいのか、当初の意気込みほどには答えを提供するまでには至らなかった。しかし、本特集が少しでも、読者の生物多様性の理解を深め、生物多様性と造園学を考える際の参考になれば幸いである。最後に、急な原稿依頼にもかかわらず、ご多忙中執筆いただいた皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。